女兒。再び右手を高く擧げて旗を振る。

二節

「國旗ふれ〳〵ふれ〳〵國旗」

全生。一番と同樣。

「白いたすきのおばさん達が」

「勝ってかへれと元氣な聲で」

男兒女兒共に、一番と同じ動作を行ふ。

「皆で萬歲勇ましい」

男兒は圓の內側をむき、全生兩手を高く擧げて萬歲を二回する。

三節

「國旗ふれ〳〵ふれ〳〵國旗」

一番と同じ動作を行ふ。

「行って下さいお國の爲に、勝って下さいお國の爲に」

全生旗を肩にかざし、

男兒。四呼間に四步前進し、四步目に右足(左足)の足先を左足(右足)の踵のところで輕くうつ。次の四呼間で後退する。この動作を二回繰り返す。

女兒。男兒と同じ動作をする。その爲に、前進した時には、男兒女兒が交錯する事になる。

「行くもかへるも勇ましい」

全生右手を上擧して旗を高く振りながら、各自のまわりを右に一廻りする。

「後奏」

全生旗を高くあげ、圓周に沿つて右にスキップで進む。最後に圓の內側(女兒は外側)をむき、ピアノの合圖があるまで旗を振る。

歌詞、動作共に勇ましいものであるから、步くこと、スキップ、擧手の敬禮、萬歲、旗を振る動作等、どれもきまりよく、正しく整然と行ひたい。

觀察

清水光子

寒くなること

暑くなる時もさうであるけれど、急に今日は大變寒いといふやうな日がある。その樣な日に「今日はずゐ分寒いのね」と言つて、朝大變手が冷かつたとか、着物を厚くしたとか、お庭が霜でまつ白だつたとか、氷がはつたとか話合ふ。そして話し合ひ乍ら自然に觀察する態度へと行くやうにする。寒いのねと言ひ乍ら、保姆自身が見るといふやうにして寒暖計をみる。「十度(攝氏)ね。きのふは十二度だつたのに。」などと話すやうに又獨り語のやうに言ひ乍ら。すると「それなに」、「みせて」といふ子どもがあるだらう。そしたら見せる。殊更說明しないでたゞ寒い時は水銀の上端が低い、暑い時は高くなるといふ程度に話し、よくみせる。もつとつつ込んで聞くやうな時は適當に答へ、疑問を或程度殘しておく。例へば、なぜ上つたり下つたりするの、といふやうな問に對して

さあ、どうしてかしらといふやうに。お家のお庭まつ白だつた、といふ話が出れば霜をみるやうに導く。雪ではない、冷いもの、幼稚園のお庭にもある。こゝにも、あそこにも白くついてゐる。それを一しよに集める。手にのせるととける。氷のやうね、といふ子もある。いつ降つたの、どうしてこうなつたの、といふやうな問には「さあ、いつ、ふつたのかしら、どうしてかしら」、と一しよに疑問にするといふことにし度い。

霜柱が立つやうになれば又霜柱取りが面白く、文字どほり寒さも冷さも忘れてハンカチやままごとのお皿に集めつこする子ども達である。こんな長いのがあるといふやうに長いのを比べたり、さくつと踏んでくづれるのをみたりする。中に、霜柱がきたないから洗ふと言ふ子どもがあつたら洗はせてもよい。とけてしまつてなくなつてしまふことを知ればそれでいゝ觀察が出來たのである。又お家にもつて歸ると言つて包んで日向に出しておいたらとけてしまつたといふのもそれでいゝので、とけてしまふといふこと、それでもつて歸れないことをみればそれでいい。

寒い日、何故着物をきてゐるかといふこともよく子ども達の間で問題になる。數へて比べてみる。同じ一枚でも毛絲もあれば、うすいさらし布もある。綿入は一枚でも暖かいといふやうなことを話し合ふやうに導きながら。

このごろは十二月ではまだ室を暖めるといふことはしない所が多いだらうけれど、ゐろり火鉢のまはりはもとより、ストーブ、スティームのまはりさへよいものである。一方火のそばへよることより、活動によつて暖くすることに務め、手などは摩擦してあたたかくするやうにして「乃木式火鉢」の話などしてきかせるのであるが、室を暖めるものについては又それとしてみるやうにする。その時充分氣をつけてあまりそばへよりすぎてあぶないことのないやうにするのは勿論である。あたゝめられた空氣が動いて室全體が段々あたゝまつてゆくのだといふことを、うすい紙きれなど、そばにもつてゆくと飛んでゆくことなどで知らせて話し、室を暖かく保つ爲に戸のあけたてに氣をつけるやうに習慣つける機會にする。寒くなつてもいぢけないやうに、といふのはむしろ大人に言ふことで、子ども達は體が丈夫でありさへすればいつも元氣よくとびまはつて寒いことを知らないものゝやうであるが、寒い冷いことに耐えること、酷寒の地で戰つてゐられる皇軍勇士のことを話してきかせるのも子どもの口から寒いとか冷いとかいふ言葉の多くなるこの頃、殊にきかせ度いことである。

秋蒔きの芽の成育をみるのも寒い日に、どうなつたかを見る氣持で子ども達と一しよに見まはる。霜よけ支柱などを、直す所は直したりする。

冬至

子どもへ曆的なことゝしては一ばん書間の短い日である事を話す程度にして家庭的な行事として、地方々々によつて異るであらうから、それを話し合ふやうにする。

門松・暮の町、お正月の飾り

時局柄斯うしたものを充分觀察する機會が少いであらうけれ

ど、何となく殘して置き度い氣のする風習を機會があつたらみせ度いものである。幼稚園に門松が立つたらみに行き、外へ出て町の樣子をみる。何となく年の暮らしいゆきき、ビラがはつてあつたり、おもちややには羽根や羽子板が飾つてあつたりするのをみたりする。銘々の家の飾りについて話し合つたり、わかざりなど持つて來てみせたりして、どんな年でも子ども達には樂しい、又樂しませ度いお正月を、待つ氣持を一ぱいのばしたいものである。

談話

志村貞子

早くも十二月を迎へます。寒さに負けずに元氣に戸外で遊ぶと共に、お部屋で先生を圍んで樂しくお話を聽く機會も充分に與へたいと思ひます。たとへ暖房がなくても集ふことの樂しさが、お話の樂しさが皆を暖めてくれるでありませう。

鼠の嫁入り　鼠のお父さんとお母さんが、子鼠を世界中で一番偉い人のところへお嫁にやりませうと相談をします。それから太陽、雲、風、壁と一番偉いものを尋ねていつた末、「なるほど世の中で私どもが一番偉いのですね、これは面白い、今までちつとも氣がつかなかつた」といふわけで、子鼠をお隣の鼠のところへお嫁入りさせたといふお話。繰返しで、しかも變化のある面白さが子供達に喜ばれるやうです。いふまでもない事ですが、お陽さまから雲、風、壁、鼠と變つてゆくところをはつきりと話すべきであります。その爲に一寸間をおいてまた新しい口調で始めること等が考へられます。

傘屋の長吉　長吉さんといふ傘屋の小僧さんが傘をほしてゐる時、大風が吹いてきて、傘につかまつたまゝの長吉さんを吹き飛ばしてしまひます。吹き飛ばされて大男の國に行つた長吉さんはいろ〳〵なめにあつて、また吹き飛ばされてかへつてきます。看想が奇拔でありますが、ガリバー旅行記の面白さは一寸複雜すぎるこの子供達にとつて、同樣の空想を樂しませてくれるお話ではないかと思ひます。先生もまたこの空想をたのしみにたいものであります。

お菓子の世界　幼稚園談話集第二輯に載せるお話です。お菓子の好きな君子さんは、神樣にお願ひして世界中のものをみんお菓子にしていたゞきました。お庭の石も、垣根の花も、お緣側も皆、お菓子にかはつてゐるので大よろこびでお母樣にお知らせに行きましたが、お母樣はお返事もなさいません。よくみるとお母樣もお菓子になつてゐます。びつくりして大きな聲を出した拍子に眼がさめて「あゝよかつた。夢でよかつた」といふお話。この着想もお菓子の好きな子供達を充分によろこばせ、ぐん〳〵お話の方へ引きつけられてきます。先生の思ひのまゝに、いろ〳〵なものを砂糖菓子に、クリームに、チョコレートに變へられます。ところで終りの、大切なお母樣がお菓子になるところでは、子供によつては、今迄いろ〳〵なものをお菓子にかへて樂しませてきたことが氣の毒になる程、強い感じを受けるやうでありますから子供の